

エミリ・ディキンソンと日本の花 (2-2)

鵜野 ひろ子

Emily Dickinson and Japanese Flowers (2-2)

UNO Hiroko

要 旨

Dickinson の植物標本と Perry の日本遠征隊の採取した植物標本に共通にある14種の植物を調査検討したが、*Campanula trachelium* と *Equisetum arvense*、*Pisum sativum*、*Kerria japonica* については、Harvard University Herbaria (HUH) で現物はみつからなかった。これらは既に米国でよく知られていて HUH で保存する必要がなかったので、Dickinson が譲り受けたという可能性がある。さらに、*Calendula officinalis*、*Chelidonium majus*、*Vicia sativa* は HUH に遠征隊の標本があったが、既に北米でも栽培されるなどしていたので、彼女の標本が日本遠征隊のものとは限らない。残りの7種、*Lonicera japonica*、*Berberis amurensis* var. *japonica*、*Saxifraga sarmentosa*、*Trillium erectum* (*Trillium tschonosikii*)、*Caltha palustris*、*Convallaria majalis* については、日本遠征隊以外に入手は不可能であったと思われる。それ故、彼女の父親 Edward Dickinson が政治家として日本遠征を推進していた Daniel Webster と交流があったこと、実際に日本でそれらの植物を採集した Samuel Williams が Dickinson 家も関係していた American Board から派遣された宣教師であり、知人であった可能性があること、1855年の冬、Perry の日本遠征隊の植物標本がワシントンに届いた直後に、国会議員であった父親を訪ねるため彼女が当地を訪れていること、さらにはその直後に自宅に温室を造ったことなどを考慮すると、彼女がこれらの植物標本を日本遠征隊から手に入れた可能性が高いと言える。

また、Dickinson が珍しい花を手に入れた別の経路として William Smith Clark を検討した。彼は高校時代から植物標本作成に熱心で、ドイツで隕石についての博士論文を書いている間も、数多くの植物を採集した。二人の間に交わされた手紙は残っていないが、Clark は Amherst College で学び、そこで15年間、化学および植物学の教授として教壇に立っていた。また長年 Dickinson 家の隣人でもあったので、二人の間に何らかの交流があったに違いない。園芸や植物標本作成という共通の趣味があったことから、植物標本のやり取りがあり、彼がドイツや日本で採取した花の標本を彼女に贈った可能性もある。彼はロンドンのキュー庭園で温室を見たことがあったので、彼女の温室を造る際、アドバイスをした可能性もある。

キーワード：エミリー・ディキンソン、日本の花、植物標本、ペリーの日本遠征、
ウィリアム・クラーク

Summary

Among the fourteen species of flowers which are both in Emily Dickinson's herbarium and among those collected by Perry's expedition to Japan, four species: *Campanula trachelium*, *Equisetum arvense*, *Pisum sativum*, and *Kerria japonica*, cannot be found in Harvard University Herbaria (HUH) and might have been given to Dickinson, since these were already so familiar in the United States that HUH did not have to keep them there. A further three species: *Calendula officinalis*, *Chelidonium majus*, and *Vicia sativa*, which are found in HUH, were also familiar in those days, so her species did not have to be from the expedition. As to the remaining seven species, there is a possibility that Dickinson's specimens are from the expedition, considering that she visited Washington just after the specimens' arrival there, that Edward Dickinson had connections with Daniel Webster, who had promoted the expedition, and with Samuel Williams, a missionary sent by American Board who was also one of the collectors on the expedition, and that a conservatory was built at her house in the same year.

William Smith Clark is examined as another possible route. Clark had been keeping a herbarium since his high school days, and collected species even while he was working on his dissertation on metallic meteorites in Germany. Although there is no extant letter between Dickinson and Clark, they must have been known to each other, since he studied at Amherst College and later worked there as Professor of Botany and Chemistry for fifteen years. Besides, he was her neighbor after his marriage in 1853. He may have advised Dickinson on the building of her conservatory, as he had seen one in Kew Gardens in London, and may have given her some foreign plant specimens after staying in Germany and Japan.

Keywords: Emily Dickinson, Japanese Flowers, Herbaria, Perry's Expedition to Japan, William S. Clark

アメリカの詩人 Emily Dickinson (1830-86) の作成した植物標本には、当時の米国では手に入らない植物が数多く存在する。Commodore M. C. Perry の日本遠征隊が日本およびその近辺で採集した植物標本が1855年1月ワシントンに到着した直後の2月に、国会議員の父親を訪ねると言う名目で詩人はその地を訪れ、2週間近く滞在している。また実際植物採集を行った隊員の一人 Samuel W. Williams (1812-84) は American Board が派遣した宣教師であったので、Dickinson 家の知人であった可能性が高い。しかも同年、Dickinson 家に当時まだ珍しい温室が建造されている。それ故、詩人がワシントンで生きた苗であれ、乾燥させてのものであれ、あるいは種であれ、その標本の一部を手に入れた可能性があるかと判断した(鶴野「エミリ・ディキンソンと日本の花(1)」)。そこで、Francis L. Hawks が編纂した Perry の日本遠征の『報告書』(Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan) の第2巻にある遠征隊が採取した植物標本のリスト(II 305-32)と Dickinson の作成した植物標本のリスト(複製版 174-92)に共通にある14種の植物について調査し、両者に関連がないかどうかを調べたが、前著「エミリ・ディキンソンと日本の花(2-1)」では、その内の7種についてのみ、結果を報告した。本書では、残りの7種(VIII~XIV)について報告する。さらに、Dickinson の外国産の花の別の入手経路として、William Smith Clark についても論じる。

VIII. *Saxifraga, sarmentosa* (EDH 25)

SAXIFRAGA SARMENTOSA, Linn. Simoda. (Perry II 311)

(Saxifragaceae family)

(#146, 3:90)

Dickinson の標本帳の25頁にある *Saxifraga sarmentosa* は現在では *Saxifraga stolonifera* という名前が使われているが、俗名としては Strawberry-Geranium の他に、Strawberry Begonia がある(University of Connecticut)。日本では「ユキノシタ」と呼ばれているように、「白い花を雪にたとえ、その下に緑の葉が見えるのを表現したものであろう」ということで、「日本の本州から九州、および中国に分布」し、湿った岩の上にはえ、庭に栽培する半常緑多年草である(牧野 I 160)。University of Connecticut の Biodiversity Education & Research Greenhouse によれば、原産地は東アジア、中国西部、および日本で、日陰の崖や、低地の苔むす岩に生えるということである。

Dickinson が園芸に際し参考にしていただであろうと Judith Farr が言っている(70) Joseph Breck の *The Flower Garden or Breck's Book of Flowers* (1859) には、*Saxifraga* はアルプス山脈が原産の植物の変種で、岩場や不毛の地に群生し、緑っぽい白い花を咲かせるとも香りが良いので、長い間英国の庭園で人々に好まれてきたと書かれている(152)。この本には *crassifolia* という亜種しか紹介されていないが、1866年版では *saxum* は岩の意である *frango* を割るという意で、*Saxifraga* の多くの種が岩場に生えてくるからだと説明し、*virginiensis* と *umbrosa* という亜種も紹介している(351)。しかし *sarmentosa* は紹介されていない。一方、Amos Eaton の *Manual of Botany, for North America* (1829) では、*Saxifraga* の欄に24もの亜種が挙げられ¹⁾、その内3種が

南部産、そして唯一の外来種として *sarmentosa* が挙げられている。そこには、葉は丸みを帯びて、その縁がぎざぎざしていて繊毛があり、それぞれの花の中で2枚の花弁が長いと、説明されている(382)。確かに Dickinson の標本は花や茎の形状や白い花びらの色などから、*S. stolonifera* (*sarmentosa*) である。このように、詩人が自分の標本を *Saxifraga sarmentosa* と認定したということは、Eaton を参考にしていた証拠である。なお、彼女の標本帳にはこの他に、北米東部の湿地帯に生育している *S. pennsylvanica*: SWAMP SAXIFRAGE (39) と北米中部および東部に生育している *S. virginianensis*: EARLY SAXIFRAGE (16) もある²⁾とところを見ると、彼女はこの花に特別の興味を抱いていたようである。

Perry の日本遠征隊の標本リストによれば、この花は「長い間、栽培されてきたもの」だということである(311)が、*USDA PLANTS Profile* の “Plants Profile for *Saxifraga stolonifera*” によれば、米国西海岸の3州に移入されているが、現在でも東北部には生育していないということなので、19世紀半ば、Dickinson にとってこの花は外来種の中でも非常に珍しいものであったと思われる。

Harvard University の Gray Herbaria (GH) のデータベースには、Perry の遠征隊ではなく、Commander Cadwalader Ringgold (1802-67) と Lt. John Rodgers (1812-82) の指揮の下、派遣された北太平洋探検隊 (1853-56) の Charles Wright (1811-85) と共に植物採取した James Small が下田で採取したとされる *Saxifraga sarmentosa* の標本 (#348199) しかなかった。しかし実際に2014年2月に Harvard University Herbaria (HUH) で探したところ、日付はないが、ペリーの日本遠征隊の Williams と [James] Morrow の名前が書かれた標本が見つかった(写真1)。これは、後に、著者と一緒にごこの標本を探した HUH の研究員 Walter Kitteredge 氏によって、*Saxifraga stolonifera* Curtis と認定され、GH のバーコード #518569 が付けられた。

このように、Dickinson のこの種の標本の入手経路が Perry の日本遠征隊、さらには北太平洋探検隊という可能性があることがわかった。

IX & X. *Trillium, erectum* (EDH 7 & 52)

TRILLIUM ERECTUM, Linn. var. ALBUM, Pursh. Hakodadi; in pine woods (sic).

(Perry II 320)

(Liliaceae family)

(#38 Rm 226)

Dickinson の標本の7頁と52頁に、*Trillium erectum* の押し花がある。7頁の方は、詩人の標本でも、復刻版でも、*Trillium, erectum* としているが、52頁の方では、詩人自身は *Trillium, flavum* としていたものが、復刻版では、それと同じ種類ではあるが、花が黄色い変種の *Trillium erectum forma luteum*: RED TRILLIUM (YELLOW FORM) に修正されている。

Eaton (1829) には13種の *Trillium* (ユリ科エンレイソウ属) がリストに載せられていて³⁾、その内の1種 *T. erectum* には次のような解説がついている。

erectum, (4) (false wake-robbin. O. p. w.y. M. 4.) peduncles erect or erectish (sic), with the flowers a little nodding: petals ovate, acuminate, spreading, equaling the calyx: leaves rhomboid, acuminate, sessile. Var. *atropurpureum*, petals large, dark purple. Var. *album*, petals

smaller, white: germ red. Var. flavum petals yellow: both petals and calyx leaves longer and narrower. H. H. E. 12 to 18 inches high. Leaves often 3 to 4 inches broad. Peduncles about 3 inches long. 9-16 i. S. (underline mine) (425)⁴⁾

このように、この種の特徴は花柄が直立か、それに近く、花卉と萼弁が同じに見えることで、既に *T. erectum* に3つの変種、濃い紫色の *atropurpureum*, と、白い *album*、そして黄色い *flavum* があることまで知られていた。しかし Breck (1859) には全く記載がなく、1866年版の *T. cernuum* の解説の最後に、*T. erectum* は *T. cernuum* より花びらが大きくて鈍い紫色だと書かれているだけであるのを見ると、19世紀半ばではこの花はまだ一般にはあまり知られていなかったと思われる。

Dickinson の標本帳7頁の標本は花卉が赤いので、確かに、一般に Red trillium と呼ばれている *T. erectum* である。一方、52頁にある標本は *erectum* の変種である *flavum* と彼女が判断していたところを見ると、花卉の色が黄色であったことがわかる。また、彼女が変種の *flavum* を知っていたことから、Eaton も参考にしていたことがここからもわかる⁵⁾。復刻版の際には前述のように、*Trillium erectum forma luteum* と判定されたが、7頁の *T. erectum* と比べて、52頁のものは、葉に対して花の大きさが小さい。また VanDusen Botanical Garden Association による *Trillium erectum forma luteum* の写真を見ると、花卉の色は同じ淡黄色であるが、萼が極端に細く尖っている。Dickinson の52頁の標本では尖っていないので、これとは別の変種だと思われる。

一方、Perry の日本遠征隊の標本リストの *Trillium erectum* の項目には、例外的に次のような詳しい解説が付けられている：

TRILLIUM ERECTUM, Linn. var. ALBUM, Pursh. Hakodadi; in pine woods (sic). I see no difference between this and the plant of the Northern United States, (which we still, with some misgiving, regard as a variety of the purple species,) except that the leaves are remarkable large and broad, the largest being 5 inches wide and 4 long. That the genus, although not before recorded, should be represented in Japan, is what we were prepared to expect, but the recurrence in that country of one of our own species, and in its rarer form, is remarkable. (II 320-21) (underline mine)

このように、遠征隊が函館で採取してきたものは *T. erectum* の中の変種の一つ *album* とされているということは、Eaton の解説にあるように、白い花であったようである。しかし、上記のように、鑑定した Asa Grey は、米国で見られる *T. erectum* に似ているが、葉が大きく広い点が異なっていると、相違点を認めている。

Trillium は日本ではエンレイソウ (延齡草) と呼ばれるユリ科の多年草である。緑色または緑褐色の外花被片は3個、内花被片も3個の花弁状で、白色または淡紫色だとされていて、「東アジアからヒマラヤ、北アメリカに約30種」あるとされている。そして日本には *T. smallii* (エンレイソウ)、*T. tschonoskii* (シロバナエンレイソウ、別名ミヤマエンレイソウ)、*T. kamschaticum* (オオバナエンレイソウ) の3種が生育するとされている (佐竹、『日本の野性植物』 I 44)。しかし、*T. erectum* は生育していない。それ故、Perry の遠征隊の標本は *T.*

erectum とされたが、間違いではないかと思われる。

GH のデータベースには、Perry の日本遠征隊が採取したものはなく、北太平洋探検隊の Wright が1855年に函館で採取し、1859年に *Trillium erectum* var. *japonicum* と Grey が命名したもので、現在では *Trillium tschonoskii* と修正されているもの (#56360) があった。そこで、実際に HUH で探した結果、その他にも、*T. kamtschaticum* の標本の横に、1883年に *T. Tschonoskii* と判定された標本が縦に2点並べたものが見つかり、その2点の下に、Williams & Morrow, Hakodadi (sic), Japan, May 28, fls. Greenish white と、手で書かれていた (写真2, 3)。日本遠征隊が函館で採取したこの標本は、北米に多い赤や紫のものではないので、当時は米国で知られていた白い花を咲かせる *T. erectum album* と一旦判定されたが、後にこのように、*T. tschonoskii* と修正されたようである。

牧野によれば、日本の各地、サハリン、朝鮮に分布する *T. tschonoskii* は、葉心に直立した茎を出し、端に1花を側向する。外花被3片は緑色で、内花被は、Dickinson の標本と同じく、淡黄色である (II 250)。牧野の図鑑のその挿絵を見ると、花と葉の形、大きさのバランスなどの点で、HUH のその標本と同じであり、さらには、Dickinson の52頁の花ともよく似ている。また外花被と内花被の大きさや形が同じくらいだということもその花と同じである。

それ故、Dickinson の標本帳の52頁の *Trillium* は *erectum forma luteum* ではなく、Perry の日本遠征隊の採取したものと同一である可能性のある *Lonicera japonica* (鶉野 (1)) と同じ52頁に並べられていることも考慮すると、Perry の日本遠征隊あるいは北太平洋探検隊の持ち帰ったものである可能性が高いと言える。

XI. *Vicia, sativa*. [*Vicia angustifolia*: Narrow-Leaved Vetch] (EDH 58)

VICIA SATIVA, Linn. Simoda and Yokohama (Perry II 310)

(Fabaceae family)

(#165, 3:270)

Dickinson は *Vicia, sativa*⁶⁾ としていたが、復刻版出版の際に *Vicia angustifolia* と修正された (58)。この種は、牧野の日本植物図鑑によれば、ソラマメ科オオヤハズエンドウ (*V. sativa*) 種の亜種の一つのホソバノカラスノエンドウであり、学名は *Vicia sativa* L. var. *angustifolia* Makino (III 147) で、復刻版ではこの学名を簡略化したものと思われる。牧野の解説では次のように書かれている：

田のへりにはえる越年草。全体が細くて弱々しく、小葉が極めて細く線状長橢円形。茎は多く基部から分枝して四角柱状。葉は互生し3~7対の小葉を持つ羽状複葉。小葉は線形または線状長橢円形、基部はくさび形、托葉は半切状の筋形。4月頃、葉えきから1~2個の紅紫色を帯びた蝶形花を出して開く。がく5裂、旗弁は広い。(III 147) (下線は筆者)

Perry の日本遠征隊のリストでは、*Vicia sativa* として、“Simoda and Yokohama. On hills and in ditches” (310) と解説している。GH のリストには1853年の北太平洋探検の際に Wright が下田と函館で採取した *Vicia japonica* (ヒロハクサフジ) (#63350) と *Vicia tetrasperma* (カスマグサ) (#283966)、また下田で採取した *Vicia tetrasperma* (#283964) はあったが、Perry の遠征隊の

採取したものとしてはなかった。しかし実際に HUH で探したところ、日付はないが、Simoda & Yokohama, Japan, W. & Morrow / V. Sativa と添え書きされた標本が見つかった (写真 4)⁷⁾。これは、牧野を参考にすると、葉の形や、蔓が無い点から、*Vicia sativa* L. var. *normalis* Makino (ツルナシカラスノエンドウ) (Ⅲ 137) と現在呼ばれているものではないかと思われる。

Eaton (1829) は *Vicia* 属として 8 つの種を紹介し、1 番目に *sativa* をあげているが、原産地は「オリエントから地中海にかけての地方」で、アジアなどの温暖な地域に広まったとしていて、北米でも早くから移入され、19 世紀には外来種とは見なされないほど、定着していたようである。それ故、Dickinson の標本と Perry の日本遠征隊の採取したものが、関係があったのかどうか、不明である。

XII. *Caltha palustris* [MARSH MARIGOLD] (EDH 29)

CALTHA PALASTRIS, Linn. Hakodadi (sic) (Perry II 306)

(Ranunculaceae family)

(104, Rm. 326)

Eaton (1829) には、*Caltha* の亜種の 1 番目に、*Caltha palustris*, W. が紹介されていて、茎が垂直で、葉は心臟型、やや円形に近く、葉の縁が鋭い鋸歯状であると、解説されている (13)。Breck (1866) によれば、*Caltha palustris* は多年草で 5 月の初旬に黄色い花で小川の縁や湿地帯を飾り、野性の種は花卉が一並びであるが、庭で装飾用に二重の花びらを持つものなどが栽培されていた (144-45)。また *Flora of North America* によれば、アメリカ原住民はこの花の根を風邪や炎症の治療等に使っていた。Judith Farr によれば、Dickinson の庭に “American cowslip or marsh marigold (*Caltha palustris*)” が咲いていたとあるので (230)、詩人が地元に着していたこの花を押し花にした可能性がある。

最近の、Eric Schuettpelez and Sara B. Hoot による DNA を使った研究を参考にすると、Dickinson のものは、確かに葉の形等から *C. palustris* 種だと判断できるが (252)、この種は周北 (北米・ユーラシア両大陸の寒帯) 植物として、さらに北米産、欧州産、アジア産の 3 つに分類できる (251)⁸⁾。標本帳の復刻版を出版する際には、*C. palustris* としか特定されなかったが (29)、当然北米のものと思われていたからであろう。しかしさらに、この花の亜種を幾つかの図鑑で調べた結果、詩人のものは花卉 (実は萼弁) に縦線がはっきり見えることや、花と葉の大きさのバランス、葉と (花) 萼弁の形から、北米産のものではないかもしれない。

一方、Perry の日本遠征隊の『報告書』には、Joseph Gerhard von Zuccarini (1797-1848) が記していた花の小さい種と大きな種の両方が函館で見つかったとある (II 306)。日本には、*Ranunculaceae* (キンポウゲ) 科 *Caltha* (リュウキンカ) 属の多年草である日本固有種のリュウキンカ (立金花) (*Caltha palustris* var. *nipponica*) が北海道から九州に生育しているが、茎が直立し、黄金色の花をつけることからこのように呼ばれている (牧野 II 211他)。

GH データベースには 1890 年以降に中国で採取された標本しかなく、日本で採取された物はなかった。しかし HUH での実地調査の結果、北太平洋遠征隊が函館で採取した *Caltha palustris* var. *arcticus* の標本が見つかり (104 Rm 326)、しかもそれと同じ標本紙の左上に、

Hakodadi (sic) Japan / Williams & Morrow と書かれた標本がみつかった (写真5)。それらは後に Kitteredge 氏によって、*Caltha palustris* L. として、それぞれバーコード #518563 と #518564 が付けられた。この標本と、Dickinson の標本とを見比べると、遠征隊の標本の葉の周りのぎざぎざが Dickinson のものより大きいので、別の亜種であると思われる。

HUH にはまた別に、1993年7月に福島県で採取されたとする「*Caltha palustris* L. var. *nipponica* Hara リュウキンカ」と記された標本があった (写真6)。しかもこの標本こそ、花卉の線や色、葉の大きさ、形などの点で、他のどの標本よりも Dickinson の標本とよく似ている。それ故、Dickinson の標本は *Caltha palustris* L. var. *nipponica*、即ち、日本産リュウキンカではないかと思われる。何故、この日本産の花が19世紀半ばに彼女の手に入ったかは不明である。

なお、*Caltha palustris* は一般に Marsh Marigold の他に Cowslip とも呼ばれているが、彼の顔を見るためならば、自分の命も捧げるが、それでも足りなければもっといろいろな大事なものを捧げますという詩 (F-266; about late 1861) の中で、“Bobolink,” “Roses,” “Lily tubes,” “Navies of Butterflies,” “Primrose ‘Banks’,” “Daffodil Dowries” 等と共に、“Cowslip Dells” が捧げものとして挙げられている。このように、Cowslip 即ち、*Caltha palustris* も Dickinson のお気に入りの植物の一つだったようである。

XIII. *Convallaria majalis* [LILY-OF-THE-VALLEY] (EDH 42)

CONVALLARIA MAJALIS, Linn. Hakodadi (sic). (Perry II 321)

(Liliaceae family)

(38, Rm226)

Eaton (1829) では、lily of the valley と一般に呼ばれる *Convallaria majalis* (鈴蘭) 種は米国南部産のものとして、*Convallaria* 属の最後に掲載されていて、花茎はむき出しでなめらか、葉は卵形と解説している (185)。Breck (1859) では、*Convallaria* 属の一番目に挙げられ、「エレガントで、デリーケートな甘い香りのする花として、好まれる花」だと紹介されている (105)。愛らしい姿と良い香りのため庭で栽培されていたようで、詩人の姪によれば、Dickinson 家の庭では毎年鈴蘭の花の絨毯が見られたそうである (McDowell 42, Farr 219)。1854年頃には、詩人は友人に、鈴蘭を送るつもりだったが、もう1週間待たなければならないという趣旨の手紙 (L-163, To Henry V. Emmons, May 1854?) を書いている。

さて、Dickinson の標本の鈴蘭はピンク色の花である。Breck (1859) には、*C. majalis* は白い花が咲き、赤い実がなると書かれている。また別の種、*C. racemosa* (Solomon's Seal) と *C. multiflora* (Giant Solomon's Seal) も紹介されているが、*C. racemosa* は黄色の花も咲くとしているが、ピンクの花に関しては全く記されていない (105)⁹⁾。多くの変種を紹介している Eaton も Breck も、ピンク色の鈴蘭には全く触れていないので、彼女がピンク色の鈴蘭をどのようにして手に入れたのか、興味深い。

一方、Perry の遠征隊標本リストには、Lily-of-the-valley はアジア・欧州北部に自生していて、北米ではアパラチア山系の一部であるアレゲーニー山脈の緯度39度以南にのみ限られているという説明が付いている (II 321)。HUH で探したところ、*Convallaria majalis* の標本は数多くあり、その中に、北太平洋探検隊 (1853-56) の Wright が函館で採取したものとして、

Convallaria majalis, L の標本が保管されていて、それには白い花がついていた (写真7、右下)。また1861年に外国との交換で手に入れたもので、日本の函館で採取されたとされる標本があり、これにはピンクか赤の花が付いている (写真8)。さらに別の一枚の標本紙に3点の標本があり、日付はないが、標本紙の右下に Hakodadi (sic), Japan / William & Morrow と、左下には *Convallaria majalis* L. / Neuchatel と書かれているものが見つかった。その3点の内、左の2点の花は白いが、右上の一点の花は少し赤みを帯びている (写真9)。これこそ、Perry の日本遠征隊の採取したピンク色の鈴蘭である。

日本各地に生えている鈴蘭は *C. majalis* L. var. *keiskei* Makino と言い、白い花をつけ、「君影草」とも呼ばれている (牧野 I 241)¹⁰⁾。また現在では、観賞用に西欧原産の「ドイツ鈴蘭」と呼ばれる *C. majalis* L も栽培されていて、これには「桃色花」や「八重咲」もあり、桃色花は「モイロスズラン」と呼ばれている (牧野 I 241, 佐竹 I 44)。牧野によれば、ドイツスズランは「ドイツが世界的産地で、欧州、アジア大陸の温帯に分布」(I 241) しているということである。上記のように、1854年に函館で William と Morrow によって、色のついた鈴蘭が採取され、また1861年にも函館で採取されたピンクの鈴蘭があったとすると、19世紀半ばには既に函館ではドイツ鈴蘭が自生していたということである。

さて、このように、Dickinson のピンクの鈴蘭は、当時米国には無い種であり、Perry の日本遠征隊の Williams と Morrow が函館で採取した一部である可能性がある。しかしさらに、もう一つ、別の可能性が考えられる。友人の一人、William Smith Clark が1850年から1852年にかけてドイツに留学した際に、当地でピンクの鈴蘭を手に入れ、押し花にしたものを彼女に与えた可能性があるのである。そこで、Dickinson と Clark の植物標本の関わりについて、後に論ずることとする。

XIV. [unlabeled] [*Kerria japonica* var. *pleniflora*: GLOBE-FLOWER] (EDH 41)

KERRIA JAPONICA, DC.; *Sieb. & Zucc. l. c. t. 68. Simoda and Hakodadi* (sic). (Perry II 310)

(Rosaceae family)

(#162, 3:129)

Dickinson の標本帳ではこの花にはラベルがなかったが、復刻本出版の際、上記のように判定された。Eaton にも Breck にも記述はないので、彼女はこの標本を作成した際、この花について何も知らなかったと思われる。一方、Perry の日本遠征隊の『報告書』では次のように記されている。

KERRIA JAPONICA, DC. *Sieb. & Zucc. l. c. t. 68. Simoda and Hakodadi* (sic). Both the wild, with single flowers, and the double-flowered state, so common in our gardens, under the old name of *Corchorus Japonicus*. (underline mine) (II 310)

このように、Grey は Philipp Franz von Siebold (1796-1866) と Joseph Gerhard Zuccarini (1797-1848) による『日本植物誌』(*Flora Japonica*) (1835-70)¹¹⁾ を参考に判定したと言い、単重咲と八重咲があると説明している。また彼は *Corchorus Japonicus* の名前で既に米国の庭でよく見られるとしているが、Dickinson は知らなかったようである。

Kerria japonica var. *pleniflora* (八重山吹) はバラ目バラ科 (the rose family Rosaceae) ヤマブキ属の落葉低木で、晩春に黄色い花を咲かせる¹²⁾。原産は日本と中国で、英名は Japanese Rose で、Japanese Yellow Rose とも、またイースターの頃咲くことから Easter Rose とも呼ばれている (“*Kerria japonica* ‘Pleniflora’,” *Missouri Botanical Garden*)。Alice M. Coats は、Engelbert Kaempfer (1651-1716) が1712年に初めて *Jamma* (*Yama*) *Buki* として、西欧に紹介したと解説している (116)。Kaempfer はドイツ生まれで、ロシアやスウェーデンで医学、歴史学、博物学を学んだが、オランダの東インド会社の医官として2年間 (1690-92) 日本に滞在した際に、日本の動植物、歴史、風俗などに関心を持ち、調査し、帰国後、1694年に日本の動植物に関する論文をオランダのライデン大学に提出して学位を受けた。彼の『廻国奇観』(*Amoenitatum Exoticarum Politico-physiico-medicearum*) (1712) の第5巻は「ほとんど日本の植物のみに費やされていて、324種の植物について記述されて」おり、「リンネは、後にこれを基にして『植物の種』(*Species Plantarum*, 1753) に日本の植物を世界に紹介」したということである (鈴木和夫 19)¹³⁾。また、Carl Peter Thunberg も1784年に、彼の著書『日本植物誌』(*Flora Japonica*) の中でこの花を紹介している¹⁴⁾。

しかし、実際に、実物をヨーロッパにもたらしたのは、園芸家の William Kerr で、1805年のことである (Coats 116)¹⁵⁾、学名 *Kerria japonica* var. *pleniflora* はその花を西洋にもたらした彼の名に由来している。彼はロンドンにあるキュー王立植物園に雇われていたが、その植物園の顧問であった植物学者・博物学者の Joseph Banks (1743-1820) の指示で1804年に中国および極東に派遣され、広東を中心に、ジャヴァやフィリピンなどを探検し、8年間の滞在中に多くの中国原産の植物を手に入れ、英国のキュー王立植物園に送った。中国やフィリピンの植物だけでなくそこで手に入れた日本の植物も送っている (Coats 116)。その内の一種、八重山吹は英国にすぐに定着し、1838年までに英国の数多くの家の庭に植えられるようになったということである (Coats 116)。

さて、Dickinson の標本帳のこの花には名前が記されていない。彼女が1840年代に Amherst Academy で使用した教科書 *Familiar Lectures on Botany, including Practical and Elementary Botany* (1832) (Lowenberg 70) にも、Eaton、Breck (1859) にもまだこの花は掲載されていないが、Breck の1866年出版の *New Book of Flowers* では、*Kerria japonica* が次のように紹介されている。

KERRIA—JAPAN GLOBE FLOWER

[Named in honor of Mr. Kerr, a former superintendent of the botanical garden at Ceylon.]

Kérria Japónica, —formerly called *Corchorus Japonica*—Is an elegant shrub, growing from three to six feet high, and producing a profusion of double-yellow, globular flowers. The branches are bright green, and the foliage handsome. In some localities it is a little tender, and the tops are killed down; but it sends up fresh shoots, which flower the same season. Easily propagated by suckers. (419)

このように、別名を Japan Globe Flower としているのは、八重山吹の花が丸いところからだと思われる。

Dickinson がこの花の名前を特定できなかったということは、1866年の Breck の書が出版さ

れる前に標本帳を作成したからだと思われる。HUHでは、この花の標本が見つからなかった。従って、彼女のこの標本の入手経路は不明である。

William Clark と植物標本と Dickinson

さて、Dickinson 家の隣人 William Clark が、詩人の持っていた珍しい植物標本のもう一つの入手先である可能性があるので、ここに論じることとする。

William Smith Clark (1826-86) は Massachusetts Agricultural College の学長時代 (1867-79)、日本政府の要請で1876年から77年にかけて約8ヶ月間、北海道の札幌農学校で教壇に立ち、その後の日本に大きな影響を与えた人物として有名であるが、Dickinson 家とも交流があった。Clark の伝記を書いた John M. Maki は、「Clark と Emily の兄の William Austin Dickinson はその村の指導者として互いによく知っていたであろうが、両家がどの程度親しい交流があったかを示す記録は何も無い。Clark と Emily Dickinson は会っていただろうが、ちょっとした知り合い以上のものではなかったに違いない」(翻訳は筆者、10) と書いている。しかし Clark は1844年から1848年まで、詩人の祖父である Samuel Fowler Dickinson が創設者の一人であり、父親の Edward および兄の Austin が永年、会計理事を務めた Amherst College で学んだ。大学卒業後、母校の Williston Seminary で2年間教壇に立ち、ドイツのゲッチンゲンにある Georgia Augusta University で隕石中の金属に関する論文で博士号を取得した後の1852年から、1867年 Massachusetts Agricultural College を創設して移るまで、15年間 Amherst College の教授を務めた (マキ 4, 358)。また1853年、Williston Seminary の創設者で、ボタン製造業で巨万の富を成した Samuel Williston の養女である Harriet Richards と結婚してから、別の地に家を建てる1870年まで、20年近く現在 Dickinson Homestead と呼ばれている家屋敷のすぐ近くに住んでいた (Maki 10) ので、ディキンソン家の隣人であった (地図1, 2参照)¹⁶⁾。彼と Emily Dickinson が交わした手紙は残存していないが、詩人は1854年、隣人となった Clark が Dickinson 家の通う教会に来たことを、兄への手紙の中で書いている (L-185)。また1862年には従妹への手紙の中で、Clark が南北戦争従軍中、Amherst College の学生であった若者が彼の傍らで亡くなった時の彼の様子を知ったことを語っている (L-255)。さらに、1883年10月、詩人の甥、Gilbert が腸チフスで急死した際に、Clark 夫妻が Austin Dickinson 夫妻に宛てたお悔みと慰めの手紙が残っている (Courtesy, Brown University Library)。故に遅くとも、彼が1852年に Amherst College に奉職し、1853年から Dickinson 家のすぐ裏の家に住むようになってから晩年まで、少なくとも両家の間に交流があったことは確かである。

Clark が Amherst College の学生であった頃から Emily Dickinson と個人的な交流があったかどうかという点については不明であるが、アマストは小さな大学町であり、また Amherst Academy の生徒が Amherst College の講義を受ける機会もあったので、学生であった Clark が Amherst College 関係者の Dickinson 家の娘と出会うことは十分可能であった。当時、Clark と Dickinson の両者が植物に対して大変興味があったことなどを考慮すると、Ruth Owen Jones が “Neighbor - and friend - and Bridegroom - ’ William Smith Clark as Emily Dickinson’s Master Figure” で主張するように恋愛関係にあったとまでは言えないが、二人の間にある程度の交流

があったと思われる。

さて、William Clark は1841年から1844年まで Williston Seminary に在学していた際に、鉱物学だけでなく植物学に興味を抱くようになり、植物標本を作成するようになったと言われている (Maki 18)。そして1844年 Amherst College 入学後は、「科学、わけても化学と地質学とを専攻したが、これが植物学と共に彼の生涯を通じての専門分野と」なった。なお、後の1852年から Amherst College 在職中には、化学、動物学と共に、植物学についても担当している (マキ4)。大学1年生の時には妹の Harriet への手紙の中で、その前の夏に一緒に花を探して歩き回ったことを懐かしく思い出すと言い、さらには大学在学中、家族への手紙の中で、特に妹 Harriet への手紙の中で、花について、採集した花の標本や、花のいろいろな保存技術について記している (Maki 18)。彼はまた Amherst College で化学・博物学教授である Charles Upham Shepard から鉱物学を学んだのであるが、植物学についても指導を受けた。二人は共に近辺の山に登り、様々な植物に触れ、植物学への造詣を深めたが、彼は押し花専用の道具を手に入れ、植物採取にも本腰を入れて行ったと言われている (小枝 64)。Shepard からの教えの一つに、「霜が降り始める前に午後には花を集めなさい。大きく十分育った標本を選びなさい。常に小さな標本の根を取りなさい。花を広げすぎて痛めてはいけません。毎日紙を取り替えなさい。それぞれの科に従って植物標本箱の中に整理しなさい。花にのりをつけてはいけません。細長い紙片で止めなさい」(1847年6月) というものがあった (小枝 64-65)。Emily Dickinson も1845年の Amherst Academy 時代に植物標本を作成していて、友人にも標本を作ることを勧めていたが (L-6, To Abiah Root, 7 May 1845) (鶴野 (1) 195)、標本帳の復刻版を見ると、彼女も標本を「細長い紙片」で止めている。このことは Shepard 教授あるいは Clark からの影響と考えられないだろうか？あるいは、同じく植物学や植物採集に興味があったので、それぞれ別々に Shepard 教授と接触して、彼を仲介として早い時期に二人は出会っていたかも知れない。

Clark の植物標本作成は大学卒業後も続き、1850年10月、留学のためドイツに行く途中、英国ロンドンのリンネ協会で、Carl von Linn (1707-1778) の作成した植物標本帳を見て、妹への手紙の中で、いかにそのコレクションが体系づけられているか、またどのように標本が保管されているかについて詳細を記している。なお、その標本は台紙に糊で止められていたということである (Searcy 8)。留学先の Georgia Augusta University では、隕石の化学分析についての博士論文を作成したのであるが、当地の植物園の園長である Friedrich Gottlieb Bartling 教授による「経済植物学」という授業も受講していた。そのノートの最初に、「植物学は自分の観察によってのみ習得される。植物の知識を得ようとする者は誰でも植物標本を作成すべき」だと書かれている (Searcy 9)。そして、妹への手紙には、「この夏、花の標本を収集し、とても熱心に植物学を学んでいます。既におよそ600種集めました」と、書かれていたそうであるが、その標本は現存していない (Searcy 9)¹⁷⁾。

Clark はドイツから帰国後、1852年10月より分析化学および農芸科学の教授として、また一時はドイツ語教員としても、Amherst College の教壇に立ったが (Maki 47)、植物学の授業も担当し、さらには一般人対象の植物学講座も担当した¹⁸⁾。それには、Saturday collecting rambles という、即ち、土曜日ごとに、あちこちを歩いて植物採集するという行事も含まれており、好

評だった (Searcy 9)。彼はさらに園芸学にも興味をいだいており、1856年には自宅に温室を作り (Searcy 9)、また Amherst College 構内にも温室を建て、珍しい植物を集めた (小枝 85)。Emily Dickinson は1855年に自宅に温室を造っている。それ故、Perry の日本遠征隊が持ち帰った植物標本を幾らか手に入れ、その内の生花や、苗、種、のために造ったのではないかというのが私の推測であるが、ほぼ同じ時期に、隣同士で温室を建てたと言うことは興味深い。Clark は1850年、ドイツ留学に行く途中ロンドンに立ち寄った際、キュー植物園で温室を見て刺激されたと言われている (小枝 85)。Dickinson 家で当時まだ珍しい温室を造るには、実際の温室を見たことのある Clark のアドバイスが必要であったであろう。そして、翌年には、彼自身も自宅に温室を造ったのではないだろうか。

Clark はまた、1867年から1876年まで Massachusetts Agricultural College の学長時代に、「植物学博物館、植物標本庫、ダフィー植物温室」を造ったが、「ダフィー植物温室の最初の植物のいくつかは、Clark のアマストの自宅から持ってきたもの」(Searcy 12)であり、当時 Clark 家でも植物採集が「家族の活動の一つになっていた」(Searcy 12)¹⁹。また、彼は札幌農学校時代、当地で精力的に植物標本を作成したようで、「少なくとも166点の維管束植物標本と43点の地衣類標本を採集した」(Searcy 13)。

このように Clark と Dickinson との交流の可能性を考慮すると、彼が彼女にドイツで作成したドイツ鈴蘭の標本を、あるいは後の札幌時代に北海道で採取したピンクの鈴蘭の標本を、自分と同様、植物標本作りや園芸に興味のある彼女にお土産として与えた可能性があると言える。さらには、二人が園芸や植物標本作りを趣味とする者同士として、長年にわたってその他の珍しい花の標本を互いにやり取りしていた可能性もあると思われるのである。

「エミリ・ディキンソンと日本の花」の (1) および (2-1)、そして今回の (2-2) で見てきたように、Dickinson の植物標本と Perry の日本遠征隊の採取した植物標本に共通にある14種の植物に関して、HUH で実地調査をし、検討した。その中で、*Campanula trachelium* と *Equisetum arvense*、*Pisum sativum*、*Kerria japonica* については、HUH で標本の現物はみつからなかった。これらの植物は1850年代、既に米国で栽培されるなどして珍しくなくなっており、HUH では保存する必要がなかったので、遠征隊の採取してきた標本を Dickinson が譲り受けたという可能性がある。さらに、*Calendula officinalis*、*Chelidonium majus*、*Vicia sativa* は HUH に遠征隊の標本があったが、既に北米でも栽培されるなどしていたので、Dickinson の標本が日本遠征隊のものでしかないとは言えない。次の6種、*Lonicera japonica*、*Berberis amurensis* var. *japonica*、*Saxifraga sarmentosa*、*Trillium erectum* (*Trillium tsconosikii*)、*Caltha palustris*、*Convallaria majalis* は、Dickinson にとって、日本遠征隊以外には入手不可能であったと思われる。それ故、Dickinson の父親が日本遠征を推進していた Daniel Webster と交流があったこと、実際に日本で植物を採集した隊員の一人である Samuel Williams が American Board から派遣された宣教師であり、Dickinson 家と関わりがあった可能性が高いこと、1855年の冬、Perry の日本遠征隊の植物標本がワシントンに届いた直後に、国会議員であった父親を訪ねるという名目で Dickinson が当地を訪れていること、さらにはその直後に自宅に温室を造ったことなども考慮

すると、彼女がこれらの植物を日本遠征隊から手に入れた可能性が高いと言える。なお、*Erigeron pulchellus* については、なお調査中である。

一方、日本産を含めた珍しい海外の植物を Dickinson が手に入れた別の経路として、隣人の William Smith Clark について検討した。二人とも十代の頃から植物標本作成という共通の趣味があったことや、ほぼ同じ時期に温室をそれぞれの自宅に造っていること等から、長い間すぐ近くに住まいしており、二人の間に交わされた手紙は残っていないので、どの程度だったかはわからないが、植物標本作成や園芸を通じて交流があり、標本のやり取りもしていたのではないかと思われるのである。

注

*本研究は学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（23520348））の助成を受けた研究成果の一部である。

- 1) なお、Phelps の *Familiar Lectures on Botany* (1832) では、*virginien^osis* (rock saxifrage) と *pensylva^onica* (water saxifrage) が、外来種の *sarmento^osa* (beef-steak, creeping saxifrage) とともに紹介されている (408)。
- 2) Eaton の *Manual of Botany* (1829) では、*S. pennsylvanica* の英名は water saxifrage で、*S. virginiensis* の英名は rock saxifrage となっていて、現在の名前と異なるようである。
- 3) その内、4種が南部原産という。
- 4) Phelps の *Familiar Lectures on Botany* (1832) には、Trillium の欄に、*pen^odulum* と *erect^otum* の2種類だけ掲載されているが、*erect^otum* の説明はこれと全く同じである (412)。
- 5) このように、7頁の標本を作成した際と、52頁の標本を作成した際の知識が異なっていたことがわかる故、作成の時期も多少離れていたと推測できる。もし作成の時期が近ければ、標本帳の同じ5頁に2種類の Iris を並べ、また23頁に Ranunculus の6種類、33頁に Pelargonium の6種類、46頁に Viola の9種類、57頁に Narcissus の6種類を並べたように、同じ種類の花を同じ頁か近くに纏めていたに違いない。なお、ディキンソンの標本帳には、他に、Trillium, cernuum: NODDING TRILLIUM (43) と、Trillium, pictum. / *Trillium undulatum*: PAINTED TRILLIUM (37) が入れられている。
- 6) Eaton (1829) は *Vicia* 属として8つの種を紹介し、一番目に *sativa* (種) を挙げている (440)。
- 7) この標本は2014年2月22日に、Kittredge 氏よりメールで、“*Vicia sativa* L. #518571” になったとの連絡があった。
- 8) 他にアジアだけのものとして *Caltha scaposa* が、また北米とアジアのものとして *Caltha natans*、北米だけのものとして *Caltha leptosepala* ssp. *howellii*、と *Caltha leptosepala* ssp. *leptosepala* がある (251)。その他の大陸についてはここでは省略する。
- 9) 北米の植物を分類した Eaton の *Manual of Botany* (1829) では、*Convallaria* を、花冠が4枚に開いている種、6枚に開いている種、半ば鐘状の6枚の種、花冠が6つに先だけが分かれているシリンダー型の種に、大きく分類し、そのそれぞれに何種類もの変種が紹介されている (184-85)。そして、最後に南部に自生するものとして、スズランを “majalis, W. (lily of the valley. A. w. J. 24.) scape naked, smooth: leaves oval-ovate.” と、紹介している (185)。
- 10) 写真7の標本紙の中央に、1964年に University of Wisconsin から手に入れたと記された *Convallaria Keisukei* Mig. の標本がある。
- 11) 鈴木和夫によれば、ドイツ生まれの Siebold はヴェルツブルグ大学で医学と自然科学を学んだ後、「東インド会社に軍医として勤め、1823年に長崎出島の医官として渡日した。」彼は日本の植物を愛し、「園芸種苗をオランダに送った」。そして帰国後、日本の植物について *Flora Japonica* (1835-70) を著したが、「ツンベルグの『フローラ・ヤポニカ』とは異なる著作にするべく共著者にミュウヘン大学の植物学者ツッカーニ教授…の協力を得た」(23-24)。
- 12) 牧野富太郎によれば、「山吹は山振という意で、枝が弱々しく風のままに吹かれてゆれやすいから。

日本各地および中国に分布。山間の谷川ぞいに多く、庭に栽培する落葉低木。幹は直立、東生、高さ2 m くらい。葉は互生、2列、長さ6~7 cm。托葉は早落性。花は4~5月、新側枝の先に1個、径4 cm くらい。がく5深裂、花弁5。果実は5、うち成熟するのは4~1」(I, 151)。

- 13) 松井洋子によれば、ケンペルの唯一の著作『廻国奇談』の序文で、彼は『今日の日本』『ガンジス以東の植物界の図鑑』『旅行記』の三作を予告したが、それらを刊行する前に1716年死亡した(24)。しかし後に、ケンペルの原稿を基に、『廻国奇観』から日本に関する6編の論文を加えたものを英訳して作成した『日本誌』(*The History of Japan*)が1727年に刊行された(25)。「ケンペルの著書は、ヨーロッパでベストセラーとなり、18世紀ヨーロッパの啓蒙思想家たちの日本観に大きな影響をあたえた。…ペリーが日本に来航する際も最新のシーボルトの著作とともにケンペルの『日本誌』(『日本の歴史』)を持参しており、100年以上日本に関する基本的参考文献として読み継がれたのである」(29-30)。一方、このオランダ語版が18世紀後半には日本に輸入されていて、松浦静山らが読んでいたことがわかっている。また、一部が日本語に翻訳もされていた(30)。
- 14) 鈴木和夫によれば、ツンベルグはスウェーデン生まれで、ウプサラ大学で学び、カール・リンネ(Carl von Linné)の第一の高弟となり、後にはリンネの業績を継承する植物学者として、ウプサラ大学の教授、学長を務めた。1775年、東インド会社の医官として長崎に赴任し、1年半の日本滞在中、江戸への参府の際に、道中、植物採集をし、日本の植物について多くの論文を発表した。中でも『日本植物誌(フロラ・ヤポニカ)』は「日本の植物について画期的な著書」で、「約812種の日本の植物が記載されて、新属26、新種418が発表された」(22)。
- 15) なお、『シーボルト日本植物誌』の監修・解説をしている大場秀章によれば1803年となっている(212)。
- 16) ディキンソンの生まれた屋敷 Dickinson Homestead は彼女の祖父 Samuel Fowler Dickinson がアマストの Main Street に、町の初めての煉瓦造りの家として、1813年に建てたものであるが(Habegger 9)、彼が Amherst College 創設のため、私財を投げ打って、破産したため、詩人の父親 Edward が一旦、1840年に手放し、当時の West Street (現在の North Pleasant Street) の家に移った(129)。その後、その屋敷を所有していた David Mack が亡くなった1年後の1855年に、Edward がその屋敷を買戻し、改築・増築の後、その年の11月にディキンソン家はそこに戻った(340)。地図1 “Amherst Village 1856” では、ディキンソン家の名前はまだ West Street に記されたままで、Main Street の家はまだ Mrs. D. Mack と記されたままとなっている。また1855年に隣りに建てられた詩人の兄 Austin の家も見えるが、まだ名前は記されていない。地図2 “Amherst” (1860) には、それぞれの家の横に “W. A. Dickinson,” “E. Dickinson” と、所有者の名が記されている。
- 17) なお、現存する彼の作成した標本は、Amherst College を卒業し、Williston Seminary で教えていた時代(1848~50)のものであり、それ以前や以降のものは残っていないということである(Searcy 8)。
- 18) 小枝によれば、Amherst College 理学科開設当初、地質学の担当は Edward Hitchcock、数学・物理学は Ebenezer Strong Snell、化学は Clark、農業は John Adams Nash、鉱物学は Shepard、動物学は Charles Baker Adams、植物学は「化学担当教員が兼任したという理由から」Clark、心理学・哲学史は Joseph Heaven、言語学・文学は William Seymour Tyler と George Baker Jewett であった(110)。
- 19) Searcy によれば、Clark の長男 Atherton は同大学時代に「もっとも優れた標本集を持って卒業する」学生に与えられる「ヒルズ賞」を獲得したということである(13)。現在、同大学に保管されている Atherton 作成の標本帳の中には、William Clark の採取した珍しい植物も入っている(Searcy 9)。また、日本へ行く途中の Clark から妻への手紙には、子供たちに植物の名前をできる限り覚えさせ、長男が弟を植物採集に連れて行くようにとの指示などがあるということである(Searcy 9)。

参考文献

- Breck, Joseph. *The Flower Garden or Breck's Book of Flowers*. New York: A. O. Moore, Agricultural Book Publisher, 1859. Reprint by BiblioLife, LLC. Print.
- . *New Book of Flowers*. N.Y.: Orange Judd Company, 1866. Reprint from the collections of the University of California Libraries. Print.

- “*Caltha palustris* L.” *Flora of North America*. Vol. 3. Web. 6 July 2014.
- “Charles Wright (1811-1885).” *Library of the Gray Herbarium*. Harvard University Herbaria Home Page. n.d. Web. 18 Feb. 2014.
- Clark, W. S. and H. R. Clark. 1883. 8 October – letter to Mrs. W. A. Dickinson. Courtesy, Brown University Library.
- Coats, Alice M. *Garden Shrubs and their Histories*. N.Y.: Simon and Schuster, 1992. Print.
- Dwellely, Marilyn J. *Summer & Fall Wildflowers of New England*. Camden, Maine: Down East Enterprise, Inc. 1977. Print.
- Eaton, Amos. *Manual of Botany for North America: containing generic and specific descriptions of the Indigenous Plants and Common Cultivated Exotics, growing North of the Gulf of Mexico*. Fifth Edition. Albany: Websters and Skinners, 1829. Print.
- Emily Dickinson's Herbarium*. A Facsimile Edition. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 2006. Print.
- Farr, Judith. *The Gardens of Emily Dickinson*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2004. Print.
- Franklin, R. W., ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vol. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 1998. Print.
- “Gray Herbarium.” Included in “Specimens Databases.” *Harvard University Herbaria*.
- Habegger, Alfred. *The Life of Emily Dickinson: My Wars Are Laid Away in Books*. NY: Random House, 2001. Print.
- Hawks, Francis L., ed. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy*. Vol. 2. Washington: Beverley Tucker, 1856. Print.
- Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, eds. *The Letters of Emily Dickinson*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard UP, 1958. Print.
- Jones, Ruth Owen. “Neighbor – and friend – and Bridegroom – William Smith Clark as Emily Dickinson’s Master Figure.” *The Emily Dickinson Journal* 11.2. (2002): 48–85. Print.
- “*Kerria japonica* ‘Pleniflora’,” *Missouri Botanical Garden*. Web. 9 Sep. 2014.
- Maki, John M. *William Smith Clark: A Yankee in Hokkaido*. Sapporo: Hokkaido UP, 1996. Print.
- McDowell, Marta. *Emily Dickinson's Gardens*. New York: McGraw-Hill, 2005. Print.
- Natural Resources Conservation Service. *Plants Profile for Saxifraga stolonifera (Creeping saxifrage)*. United States Department of Agriculture. Web. May 22. 2015.
- Phelps, Lincoln. *Familiar Lectures on Botany, including Practical and Elementary Botany, with Generic and Specific Descriptions of the Most Common Native and Foreign Plants and a Vocabulary of Botanical Terms, for the Use of Higher Schools and Academies*. Hartford: F. J. Huntington, 1832. Print.
- “Plants Profile for Saxifraga stolonifera (Creeping saxifrage).” *USDA PLANTS*. Natural Resources Conservation Service, United States Department of Agriculture. Web. 28 May 2014.
- Schuettpelz, Eric and Sara B. Hoot. “Phylogeny and biogeography of *Caltha* (Ranunculaceae) based on chloroplast and nuclear DNA sequences.” *American Journal of Botany* 91 (2) (February 2004): 247–53. Web. 8 Sept. 2013.
- Searcy, Karen B. “The Plant Collections of William S. Clark.” 『クラーク博士と札幌の植物』(北海道大学総合博物館企画展示図録)。札幌：北海道大学総合博物館、2012。8-13. Print.
- “Specimens Databases.” *Harvard University Herbaria*. Harvard University, 2009. Web.
- University of Connecticut. “*Saxifraga sarmentosa* L. f.” *Biodiversity Education & Research Greenhouses*. Web. 17 April, 2014. 6 May, 2014.
- VanDusen Botanical Garden Association, “*Trillium erectum forma luteum*” (Photo.). *City of Vancouver Archives*. Web. 22 May 2014.
- 大場秀章、監修・解説。『シーボルト日本植物誌』。ちくま学芸文庫。東京：筑摩書房、2007。Print.
- 小枝弘和、『William Smith Clark の教育思想の研究』。京都：思文閣出版、2010。Print.

佐竹義輔、大井次三郎、北村四郎ほか編、『日本の野性植物 草本』。全3巻。東京：平凡社、1981年。
Print.

鈴木和夫、「Engelbert Kaempfer」「Carl von Linn」「Carl Peter Thunberg」「Phillip Franz von Siebold」、『農学部図書館所蔵資料から見る「農学教育の流れ」』。東京大学農学部創立125周年記念農学部図書館展示会パンフレット。東京大学農学部。平成12年3月27日～3月31日。19-26。東京大学農学部図書館ホームページ。27 March 2000. Web. 5 Sept. 2014.

筑波実験植物園。「エンコウソウ」。『植物図鑑』。Web. May 24 2014.

マキ、ジョン・エム、『W. S. クラーク：その栄光と挫折』。翻訳、高久真一。札幌：北海道大学図書刊行会、1978年。John M. Maki, *William Smith Clark: A Yankee in Hokkaido*, 1975の翻訳。新装版、1991年。Print.
牧野富太郎、『コンパクト版 原色牧野日本植物図鑑』、全3巻。東京：北隆館、2012。Print.

松井洋子、『ケンペルとシーボルト：「鎖国」日本を語った異国人たち』。日本史リブレット人062。東京：山川出版、2010年。Print.

鵜野ひろ子、「エミリ・ディキンソンと日本の花（1）—*Lonicera Japonica* Japanese Honeysuckle」。『神戸女学院大学論集』60.1（2013年6月）：193-203。Print.

———. 「エミリ・ディキンソンと日本の花（2-1）」。『神戸女学院大学論集』61.1（2014年6月）：155-67。Print.

写真 HUH (Harvard University Herbaria) :

Courtesy, Gray Herbaria of Harvard University, Cambridge, Massachusetts, USA



写真1 *Saxifraga sarmentosa* "Simoda Williams & Morrow"
[*Saxifraga stolonifera* Curtis, GH #518569] (HUH)

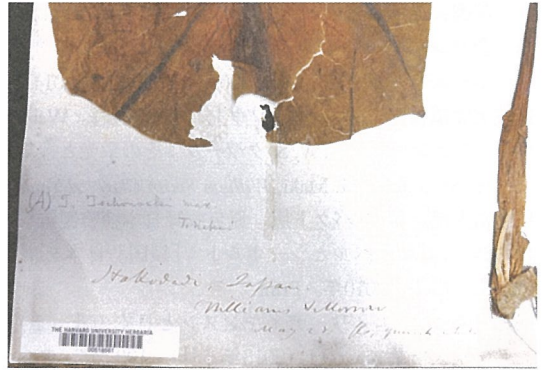
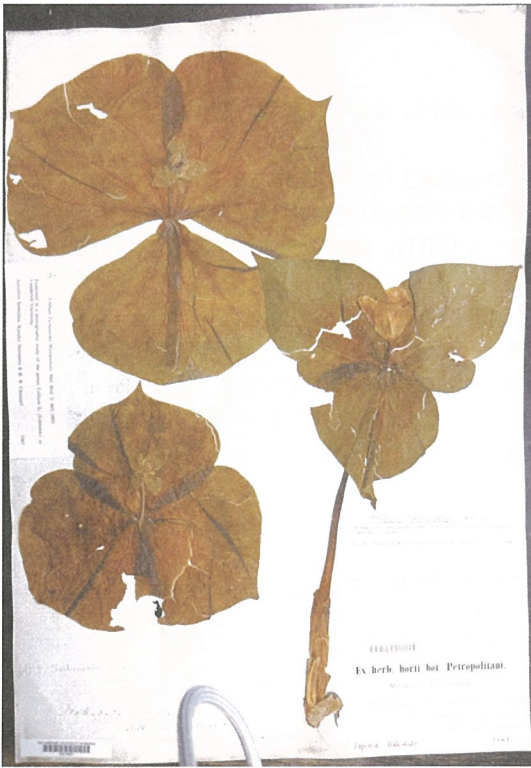


写真2・3 “(A) *J. Trillium Tschonoskii max.* /
Hakodadi, Japan / Williams & Morrow /
May 28, fls. Greenish white”
[GH #518561] (HUH)



写真4 *Vicia sativa*
“Simoda & Yokohama, Japan. W. & Morrow”
[GH #518571] (HUH)

写真5 “*Caltha palustris L. var arcticus* / Hakodadi, Japan” /
C Wright Coll. / Herbarium of the North Pacific
Exploring Expedition under Commanders Ringgold
and Rodgers, 1853-56. (右) [GH #518563]
(HUH)
“Hakodadi, Japan / Williams & Morrow” (左上)
[GH #518564] (HUH)



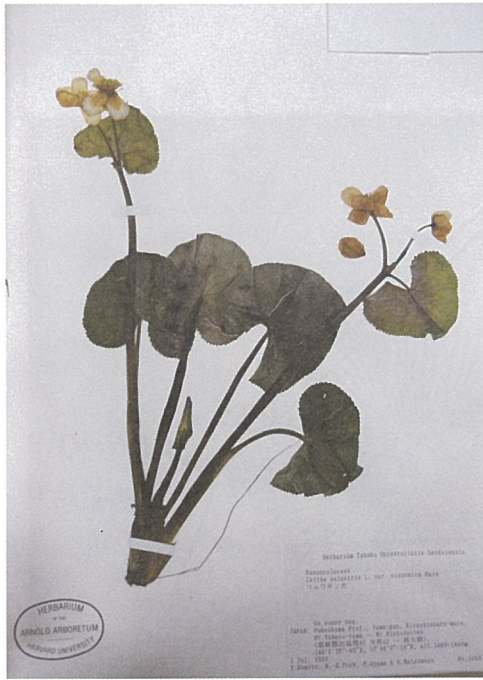


写真6 “*Caltha palustris* L. var. *nipponica* Hara /
リュウキンカ” / Herbarium Tohoku
Universitatis Sendaiensis” /
JAPAN, Fukushima Pref... (HUH)



写真7 “*Convallaria majalis*, Hakodadi, Japan” /
C. Wright coll. / Herbarium of the North Pacific
Exploring Expedition... (右下) (HUH)

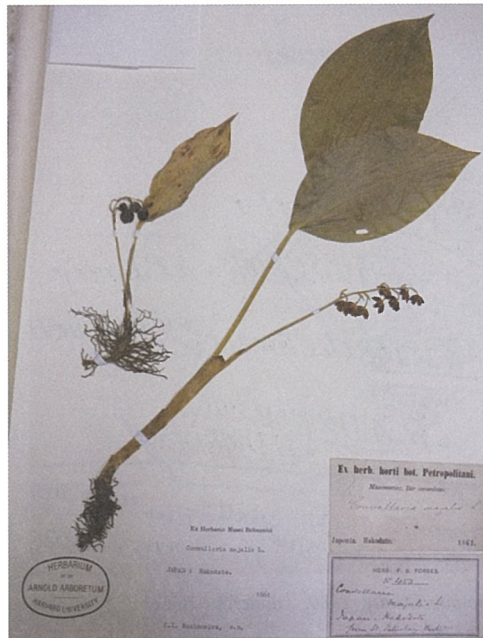


写真8 “*Convallaria majalis* L. / Japan: Hakodate. / 1861 /
Ex. Herbario Musci Britannici” (左上) (HUH)
“*Convallaria majalis* L. / Japan, Hakodadi /
from St. Petersburg Herbarium /
HERB: F. B. Forges. No. 453” (右) (HUH)

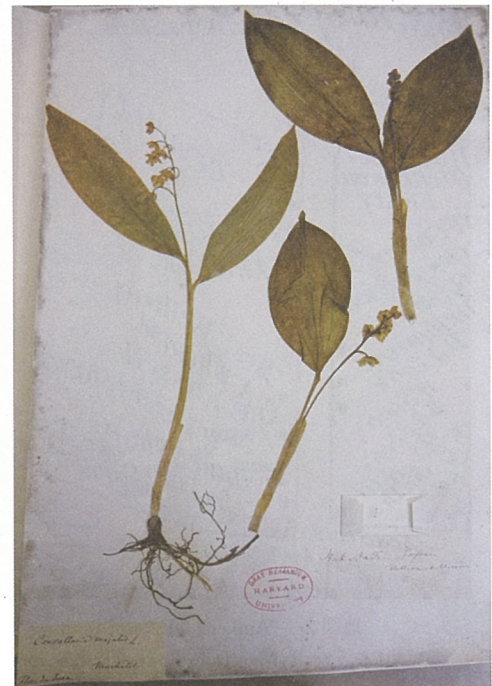
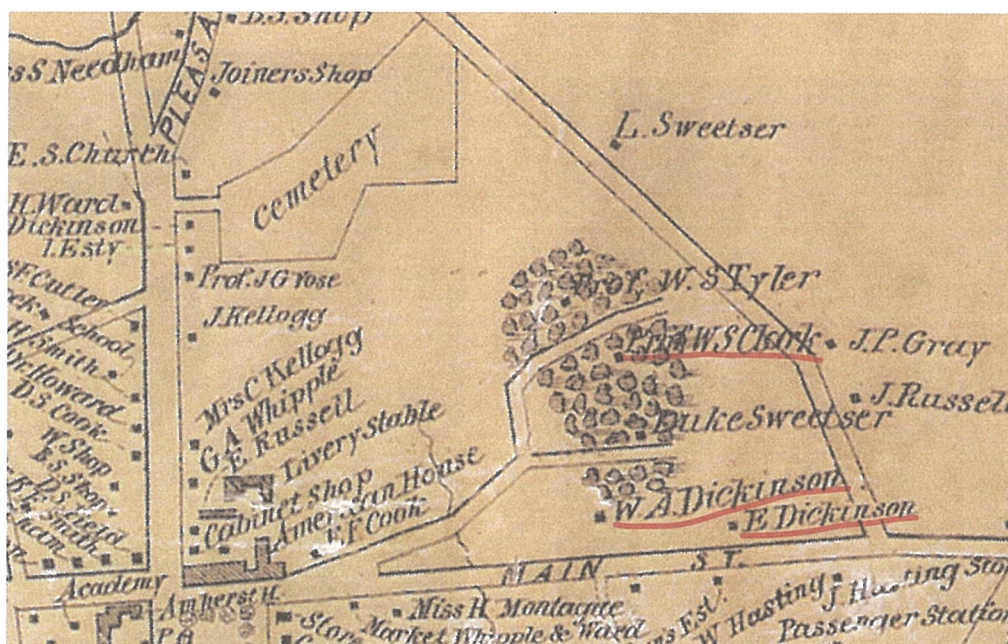


写真9 “*Convallaria majalis* L. / Neuchatel” (左) (HUH)
“Hakodadi, Japan / Williams and Morrow” (右)
(HUH)

地图



地图1 “Amherst Village 1856.” Excerpt from the *Map of Hampshire County, Massachusetts 1856*. (underline mine)
Map from www.old-maps.com.



地图2 “Amherst.” Excerpt from the *Map of Hampshire County, 1860*. (underline mine)
Map from www.old-maps.com.

(原稿受理日 2014年9月18日)